

文学と東洋

魚返善雄著

# 文学と東洋

魚返善雄著



小峯書店

## 〔著者紹介〕

1910年大分県に生まれ、1926—1930、中国（東亜同文書院）に留学、文学・語学を研究。現職、東洋大学教授（文学・漢文学、言語学・英語・中国語を担当）、東京大学講師。

（文学関係の著訳書）

- 「大陸の言語と文学」（三省堂，1940）  
「新中国小説集」（目黒書店，1942，1948）  
「ソロモン——万人の聖書」（生活社，1947）  
「魯迅短編集」（目黒書店，1948）  
「完訳遊仙窟」（東書房，1948。創元文庫，1953）  
「民国の文芸」（育生社，1948）  
「旧中国小説集」（目黒書店，1949）  
「水滸伝」（改造社，1949，新制社，1959）  
「西遊記」（改造社，1950，市民文庫，1951）  
「迷路の殺人」（The Chinese Maze Murders，講談社，1951）  
「四世同堂」（月曜書房，1951。角川文庫，1953—1958）  
「中国文学入門」（東大出版会，1951）  
「ちゅうごく童話集」（河出書房，1951）  
「日本文学と中国文学」（弘文堂，1952）  
「中国千一夜——今古奇観」（出版協同，1952—1953）  
「中国文学読本」（開成館，1955）  
「人間味の文学」（明德出版，1957）  
「中国文学史」（La littérature chinoise，白水社，1957）  
「世界名詩集大成——東洋」（平凡社，1959）

## 文学と東洋

昭和卅六年九月七日第一刷発行

著者 魚返善雄

発行者 小峯光一

印刷者 新倉誠一

発行所 小峯書店

東京都豊島区雑司谷町一の

三七五

新倉東文堂印刷 大場製本

まえがき

文学をつねに政治や道徳と結びつけ、あるいはそれに従属させようとする向きもあるが、常識からいってもそこには無理がある。そのような限定は文学の進歩をはばみ、単調で深みのないものにしがちである。

論理的にいえば、文学は政治や道徳と同位の概念であり、一般文化史という上位概念に包括される。こうした位置づけにおいて、両者は相互にかかわりを持ちながら、人間生活の向上に寄与してきたのである。

文学は言語の芸術とも呼ばれるが、それは表現の手段が(文字をも含めた広い意味の)言語であるというのであって、一方が他方に従属する関係にあるのではない。

もう一つ重要なのは、文学の一般性に対する民族や風土の特殊性である。われわれが「東洋」の民族として、また日本語を母語とする個人として、「文学」の一般性を追求するにあたって、この点を忘れてしまったのでは真実が見えなわれるであろう。

昭和三十六年八月

著者

文学と東洋

△目

次▽

まえがき

日本文化と中国文化	一
伝統と近代化	四
中国古典と現代人	一〇
孔子と論語	一四
東洋人の笑い	一六
あの世とこの世	一七
中国の推理小説	二八
中国文学の歩み	三五
詩経から現代詩まで	一五

人生と詩歌	……	一七
民族・言語・詩	……	一八一
中国の詩と日本の歌	……	一七六
流行と不易	……	二〇五
対偶と押韻	……	二三五
稗史小説と明治小説	……	二三五
日本文学の中国への影響	……	二四八

索引

あとがき

カバー(琵琶行図)

## 日本文化と中国文化

## 一 日華文化の基本的認識

「神は人類に永遠を思ふ心をあたえた。だから人類は無限なるものを知ることができない」と「聖書」は説明する。中国の慣用語には「飲水思源」（水を飲んでのみなもとを思ふ）といふのがあって、およそ文化の恩恵を受ける者は人情としてもその本原をたずねなくなるものだと教える。一方は、人類の持つて生まれた宇宙探究心を、他方は人類の進歩にともなう文化探究欲をさし示している。

そこまでは普遍的なものである。ところが、人間はその処遇によって探究の対象がちがってくる。孤独ということばはあるが、完全な孤独では社会生活はおろか個人の生存も困難であるから、いきおい家族を求め、そのあとには系譜を求めたくなる。系譜が神にまでいたれば問題

は普遍化するのであるが、たいていは中途にとどまって、そこで満足する。多分に感情的な日常生活においてそうであるばかりでなく、理論的な学問研究においてもその傾向が強い。

日本民族は歴史時代以前から「島国」の環境におかれてきたので、物質面においても精神面においても、大陸にみなもとを求めようとする一種の潜在意識があるらしい。それが学者の場合になると、あえて大陸と限定はしないまでも、やはり日本以外のどこかに根原を求めようとする傾きをまぬかれないようである。もちろん、探究の対象が結果的に見てたしかに日本以外に存在したときにはその態度は妥当であったことになるが、はじめからそのような態度をとり仮定を設けてかかることは、たとえ無意識的にもせよ学問として許されることではない。

日本の民族や文化の起原について学者たちのとっている態度には、右のような理由から、どうかと思われるものもある。現在のわれわれがその一員であるところの日本民族の系譜についても、身びいきや独りよがりはもちろん許されないが、その反対に、なにごとともみな現在の位置以外のところに本原があると思っっているような態度は、近代科学の各分野における成果から考えても誤りである。人も知るとおり、日本列島は人類文化史からいえば「近世」とでもよびたいくらいの時代に、なおアジア大陸と地続きであった。したがって、現在の日本人の直系の

祖先がすでに幾万年もまえからこの土地に住んでいたと想像することもできる。このことは、石器時代以前に使われていた石器の発見や、さらに古い、いわゆる原人の実在によっても考えられる。たとえ系譜的な連続が証明されななくても、原人の遺骨が幾万年、幾十万年前のものであるならば、それだけ古い時代からこの土地には日本人（であったかもしれない人たち）が居住していたわけである。大陸の一角とはいえ気候風土の温和なこの土地には、ある程度の文化が生まれていたにちがいない。もちろん、アジアの北部、中部、南部、あるいは南洋との交渉もあったことであろう。いまポリネシアその他の名称でよばれている太平洋の諸地域にも、べつにネライをつけて渡っていったわけではないが、なんらかの過程でこちらから移っていった人たちもあろう。そう考えるほうが、あちらからもこちらからもみんな日本をめがけて「渡ってきた」と考える起原在外主義よりもおかしくないようである。

日本が、人類文化史的にもきわめて近い時代にアジア大陸の一部であったからには、現在の大陸との間には、渡ってきたも渡っていったものはないはずである。それはただ、同一大陸上での民族移動であり、文化の交流であったにすぎない。南アジアやインドネシアから今の中国南部を通じて日本地方や朝鮮地方へ、人または文化が移り動いたことも考えられなくはない。どち

らにせよ、土器時代もずっと末のところ、西洋ならばギリシャ・ローマの境め、中国では周の戦国時代という人類史の「近世」——たとえていえばエンパイア・ステート・ビルディングの三階めぐらいの時代になって、南朝鮮から大船団が南下し、それが日本民族を再構成し日本語に革命的变化をあたえたなどということは、民族学的にも言語学的にも確かに承認できないことであらう。

日本人は「どこからきたか？」という命題には出発点からして独断がある。「どこからきたもの」と、どうして断定できるであらうか。なるほど日本人は混血民族であるが、その混血は非常に高度のものであり、現在の中国のいわゆる漢民族にくらべて、それ以上であつても以下でないことは血液学者の報告するところである。漢民族の歴史や言語が四千年以下でないのに日本民族や日本語の歴史だけがどうして二千二、三百年ということになるであらうか。言語学者のなかには日本語が現在大陸にある同類語と分離した年代を約九千年前と見る人もある。最低それくらいの数があったたないことには、いくら古代の日本語でも体系を確立し安定させることはできなかったであらう。現在の日本語は平面地理的にみればアルタイ系と南方系の同居形態をとっているが、それを合理化するために勝手に机の上で民族を移動させてはなるまい。

もう一つ重要なのは物質文化の移動である。農作物や器具のようなものは物的証拠として残るけれども、それはつねに民族または大量の人びとの移動をともなつたと考えるのは誤りであろう。現代の世界においては、物質文化の伝達は人の移動を必要条件とせず、時間的にも急激であり、地域的にも広い範囲におよぶ。文化的才能に恵まれた民族の場合は特にそうである。千二、三百年前の日本民族が、ごく少数の帰化人から物質文化を吸収し改良発展させたことのみざましさを認めるならば、二千二、三百年前にそれを認めないこと自体が不自然である。

いろいろの点から考えてみて、日本民族の大部分はすでに考古学的時代において日本の土地に存在し、それが原人時代からこの土地にいたか、それとも途中でアジア大陸の他の地方から歩いてきたかに論なく、とにかく漢民族その他の諸民族とは別個に、そして人類史的には平等に、独自の文化を築きつつあつたと考えるべきであろう。

## 二 日華文化の基本的認識（つづき）

文化はその発生の年代が古いことよりも、持続期間が長くて影響の範囲が広く、またその程度深いことをこそ重くみるべきである。その意味で、漢民族の文化はエジプトやメソポタミ

ア、ギリシャ・ローマ、インドなどの文化にまさるとも劣らないであろう。太古の漢民族がどのような経過をたどって形づくられたかは判明しないが、人類の歴史においてまことに偉大な民族であるというほかない。かれらは気候風土の必ずしも快適でない黄河の流域に定着して困苦欠乏にたえ、年一年とたくましく成長したのであった。はじめは華北の一部に集落をいとなみ、やがて長江以北をおおう封建国家となり、中国本土のすべてにわたる帝国にまで発展し、政治的には幾多の変転をかさねながらも、民族的には東北（満州）・南洋・アメリカにまで進出した。ヨーロッパ全部をしのぐ広大な領土に人口はますます増加し、数千万人の誤差は問題にもされなかったほどである。

かれらは少なくとも三千年前から独得の文字を使用し、それらは自民族の言語によく適応して効果をあげたばかりでなく、まだ文字をもたなかった隣接諸民族にまで恩恵をほどこした。社会組織や経済生活においても豊かな経験とすばしい先見をもち、外敵に対抗するために強大な軍事力をもっていた。それにもまして特色的なのは、かれら独自の倫理体系と、「経・史・子・集」の四部にわたる大量の文献で、それらは日本人のいわゆる「東洋文化」の重要な部分を成している。

中国人の大多数は漢民族であるが、その他の少数民族にしても外見上は「黄色人種」に属し、日本人にとってはその点でまず親近感がある。それに、全面的ではないにもせよ文字を共通にしているものだから、「同文同種」というスローガンがしばしば利用された。日本が主として唐以後の中国と交通してその文物を輸入し改造したところから、文化的親族関係といったようなものが意識され、西洋諸国に対するとほまた別の感情がまつわることも否定できない。元（蒙古王朝）時代の中国が日本の恐れのもとであり、明時代の日本が中国の頸痛の種であったことも、いまは歴史上の語りぐさでしかない。日清戦争で中国が負かされたことも、かえって必要な目ざましであったとさえ、共和国になってからの中国人は考えた。シナ事変から「大東亜戦争」にかけての日本の指導者たちは、「東洋文化」の精髓である儒教倫理を逆輸出すれば中国人は随喜するものと考えていた。事実はどうかといえ、一般民衆は儒教倫理のようなよそゆきの衣服をまとして生活してはならず、大部分のインテリにとってもそれはかえって抵抗すべき古いカセでしかなかった。中国人はすでに抗日戦争以前から、日本はただ腕っぶしの強い成り上がり者であり、西洋文化の取りつき販売人にすぎないと考えていた。日本に固有または独自の文化について思いをめぐらすのはごく少数の篤志家であって、大部分の青年は

ただ、金メッキの欧米留学がかなわなかったら日本留学の銀メッキで間に合わせようという頭であった。そして日本の学校が「忠君愛国」の厳格な教育を押しつけると、結果はかえって抗日的な指導者を生み出すことになった。ただ、留日学生のうち日本人を妻にめとるもの多かつたことは、中国人を妻とする日本人のきわめてまれなのと対照的な現象であったが、日本女性の特質がどういふ点で気に入られたのかは説明がむずかしい。

日本と中国の過去の接触は、国としても民族としても、他の諸国にもありがちなように、方向のくいちがいや理解の不十分からくる悲喜劇に満ち満ちている。それというのも、外見や因縁にもとづく親近感がかえって誤ったイメージを形づくらせてしまうからであろう。日・華両国人がおたがいの歴史と現状を尊重して理解に到達することは、対西洋人の場合よりもかえって困難なのかもしれない。たがいに隣国であり、理解と友好を必要とする関係にはあるが、タカをくくった不勉強な態度では、おそらく誤解に誤解をかさねることであろう。

なによりも大事なのは、日本民族と漢民族は精神生活においても物質生活においてもたいへんかけ離れた様式を持ちつづけてきた事実を認識することである。ものの考えかたが根本的にちがうといってもよい。それはこの二つの民族のつくりあげた社会、展開させた思想が、まっ

たく異質的といってもよいほどにちがうからである。「東洋文化」とか「一つのアジア」などという概念は、外交辞令や詩的発想としてはともかく、現実はそのようなところまで到達していないし、その方向にむかってきたかどうかも疑問である。「東洋文化」の精髓として利用された儒教にしても、江戸時代の支配階級の觀念論は別として、庶民はいくらもそれに追隨しなかつた。たとえば「仁義」などという術語にしても、武士や学者と庶民とは受けとりかたが一樣でない。用語ばかりでなく、生活の軌範がまるでちがっていた。これは中国の庶民と日本の庶民をくらべてみてもハッキリとちがう。

社会の基盤が、伝統的にも構造的にもちがっており、個人の精神構造や考えかたの習慣もちがっているのに、ある特定の教義を普遍的なものとして押しつけたのでは、当事者の錯覚による自己満足しか得られないであろう。ましてただ政治的・軍事的に、「強隣」として恐れ「弱小」国としてあなごつたのでは、民族のたましいに触れることはできない。個人が平等であるように民族もともと平等なはずである。おたがいの特質を尊重し、それぞれに発展をはかるのでなくて、ただ一方を尊敬して卑屈になり、いわゆる事大主義になるようでは、相手からも真に尊敬されないであろう。まして、そういう行動を自己の名声や地位の保全に利用するなど

は、無知からくる相互誤解よりもさらに罪が深いといわねばならない。

### 三 中国文化受けいれの事情

中国文化の日本への影響は、普通に考えられているよりはるかに早い時代に始まったものと想像される。応神天皇のころ（三世紀の末という）朝鮮の王仁が「論語」や「千字文」をもたらしたとする史実が、それより前であろうと後であろうと大して問題ではない。中国側で勝手に「漢委奴国王」と書いてあたえた例の金印が第一世紀の半ばのものだからといって、そこを出発点とするわけにもいかない。そのような政治的交渉よりは文化史的交渉、ことに物質文化の移動は、はるかに早く開始されているのが通例だからである。物質文化に属する日本語の単語のうち、やまとことばとして扱われているものが実は漢語の変化したものと言語学的に推定される例もいくつもある。それらは貴族的な文字には書きあらわされなくても、庶民の話しことばとして早くから使われていたにちがいない。

しかし、中国からの借用語がいくつあるからとて、日本語と中国語は同族だということはできない。英語などは政治的語彙の大部分をフランス語から借用し、そのみなもととはラテン語